

県都千葉町の誕生

◆諸官庁の設置

明治6年(1873)6月千葉県が設置されると、7月に最初の県庁が千葉神社神官宅に置かれました。しかし翌年、火災で全焼し来迎寺へ移され、同年9月現在の中央区市場町に新築移転しています。この県庁設置を契機としてその他の官庁も次々と千葉町に建設されていきました。千葉裁判所は明治6年6月大日寺本堂を仮庁舎として開設、翌年現在地に新築移転しています。警察署は本町2丁目の民家を仮庁舎として発足、同12年には院内に新庁舎を建設移転して千葉警察署と改称しています。監獄は寒川片町にあった佐倉藩の米蔵を改修して設置されましたが(寒川監獄)、低温のため疫病の流行が多く、明治34年貝塚町に新監獄を起工、同36年には千葉監獄署と改称しています。

◆学校・病院の設置

明治5年の学制発布により市域にも次々と小学校が設立されました。設立当初の校舎は寺院や旧民家を借用したものが多く、教員も旧寺子屋の師匠や私塾の教師がほとんどでした。こうした状況から教員養成が急務とされ、印旛県庁のあった流山に印旛官立学舎(鴻台学校)が設立されます。これが千葉県の設置とともに千葉町本町に移転して千葉学校となり、同7年千葉師範学校と改称、のちに亥鼻台に移転しました(千葉大学教育学部の前身)。また、同11年には県内最初の公立中等教育機関として千葉中学校(現県立千葉高等学校)が千葉師範学校の一部を校舎として設立されています。

明治7年に千葉県知事柴原 和^{やわら}からの要請もあり、有志の寄附で共立病院が創設されました(現院内公園付近)。当初は医師2名の小規模なものでしたが、患者数の増加により同9年には裁判所の北側に移転、県営の公立千葉病院と改称します。また、医学教場・医学講習所も開設され、医師の養成も始まりました。同23年には亥鼻台に新築移転されました(千葉大学医学部及び付属病院の前身)。

明治5年に郵便役所、同12年に千葉電信局が千葉町に置かれ、郵便や電信などの設備も整い始めました。またこの時期には川崎銀行千葉支店、三井為替取扱所、第九十八銀行(現千葉銀行)などの銀行も開業しています。

◆人口の急増と都市化の進展

県庁や諸官庁・学校などが設置されると、それにともない人や物が集まりはじめます。安政6年(1859)の段階で、千葉町の人口は1,686人であったと記録されています。それが、明治7年(1876)の調査では3,110人に増加しています。しかしこれでもまだ当時の千葉町は県下9番目の都市でした。それが明治22年の町村制施行時には、合併の影響があるものの約2万人に増加し、文字通り「県都」として急激に発展していったことがわかります。明治15年頃の職業別世帯数の調査によると、千葉町は都市化の影響で、商業・雑業者が多く、特に県都として官吏が多いことが特徴となっていました。

千葉町の職業別世帯数(明治15年頃)

